

ガルマンドウ原洞穴遺跡出土の縄文晩期人上腕骨にみられた穿孔例

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】：沖縄県、洞穴遺跡、縄文晩期人骨、集骨、上腕骨、穿孔

はじめに

古人骨を多数みていると、時として理解できない事例にぶつかることがある。客観的にその状況は理解できるのであるが、そうなった原因や方法がわからないので、悩むことになる。今回紹介するのはそうした例のひとつである。

ガルマンドウ原洞穴遺跡は、沖縄県八重瀬町大字新城 1757 番地に所在する洞穴遺跡である。筆者のひとり松下孝幸が科学研究費補助金の補助を受けて、1998 年 1 月と 1999 年 1 月に、具志頭村教育委員会（現・八重瀬町）、北谷町教育委員会、糸満市教育委員会の協力を得て発掘調査をおこなった遺跡である。発掘調査の経緯や人骨所見についてはすでに報告している（松下・他、2007）。

今回、ガルマンドウ原洞穴遺跡出土人骨を改めて観察していたところ、上腕骨に穿孔があることに気がついた。筆者らはこのような事例を知らないが、今後同じような例が見つかることがあるかもしれないので、本例を紹介することにした。

資料および所見

ガルマンドウ原洞穴遺跡から出土した縄文時代晩期に属する上腕骨の数は、右側 10 本（男：5、女：2、性別不明：2、小児：1）と左側 11 本（男：8、女：2、性別不明：1）の合計 21 本である。左右対になるものが 1 組存在することなどから、上腕骨の体数は少なく見積もって 18 体分（男：11、女：4、性別不明：2、小児：1）と推測した。

穿孔が見られるのは、女性の左側上腕骨（HU-16）の骨体である。遺存状態は悪く、残存していたのは長さ約 5cm の骨体遠位部である。骨体はかなり細い。

穿孔の開口部の形状は、直径 4.1mm の正円形で、穿孔は骨体の外側前面に存在し、緻密質を完全に貫いているが、骨体内側前面の内側（髓腔がわ）までは達しておらず、骨体を貫通していない。開口部縁の外側前面には破砕面がみられるが、これは穿孔した際に緻密質表面が破砕されたようにみえる。穿孔面には骨が再生した痕跡はまったく認められないことから、骨になってから、穿孔されたものと思われる。また、穿孔面は滑らかで、まるで太めの錐で穴が開けられたような様相を呈している。穴はほぼ横方向へ向かって穿たれている。

要約

1. 沖縄県八重瀬町大字新城 1757 番地に所在するガルマンドウ原洞穴遺跡から縄文晩期人骨が土器などの遺物を伴って、集骨状態で検出された。出土した上腕骨 21 本のうちの 1 本に穿孔が認められた。

2. 穿孔が認められたのは女性の左側上腕骨体 (HU-16) の遠位部で、直径約 4.1mm の正円孔が、外側前面に穿たれていた。その向きは横方向 (外側から内側方向) である。
3. 穿孔面はきわめて滑らかで、骨が再生した痕跡はまったく認められないことから、骨になってから穿孔されたものと思われる。
4. 穿孔された理由は不明である。今後、類例の増加を待って、考察をおこないたい。

《参考文献》

1. 松下孝幸・他、2007：ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告書、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要、第2号：pp.1-37.
2. 松下孝幸、2007：沖縄県具志頭村ガルマンドウ原洞穴遺跡出土の人骨、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要、第2号：pp.38-62.

* Takayuki MATSUSHITA、** Masami MATSUSHITA (特定非営利活動法人人類学研究機構)



左側上腕骨 (The left humerus)

ガルマンドウ原洞穴遺跡 HU-16(女性・年齢不明)

(The humerus HU-16 from the Garumandoubaru cave site, female unknown age)